

9 南のマリアナ

足元に大きな黒い影を落として
屋敷だけが あたり一面で^{さんさん}燦々と輝いている
立ち込める暑さを締め出すために固く格子が下るされ
壁一面のくすんだ蔦が沈黙を封じ込めている
右手には青く霞んで連なる尾根 5
屋敷の前には干上がった川床
遥か先には岸辺の浅瀬
ギラギラと照りつける砂浜と輝く入江
女は^{つぶや}眩く「ああ マリア様」
夜に朝に 「ああ マリア様」 10
そして 唄うように「ああ ^{ひと}独りきり
生きても見捨てられ 愛しても^{ひと}独りぼっち」

女の唄が一段と悲しみを帯びてくると
女はバラ色の細い指で
深い褐色の髪を 15
額から胸元までゆっくりと
右に左に梳き流した
すると 悲しみを宿した^{まなこ}両の眼が
秘密の神殿に微かに浮かび上がってきた
そこは涙一滴流れない^{すみか}悲しみの棲家 20
女は^{つぶや}眩く「ああ マリア様
聖母マリア様 夜も朝も悲しみだけ」
そして 唄うように「ああ ^{ひと}独りきり
生きても見捨てられ 愛しても^{ひと}独りぼっち」

やがて^ひ深紅の陽は落ち 25
海上は深いオレンジ色に染まっていった
女は深く膝を折って
聖母マリアに向かって^{つぶや}眩いた
「ああ マリア様 どうかお助けください
この重荷を下ろすお許しを」 30
すると 澄み切った鏡に
はっきりと女の顔が映し出された
「これがあの 朝な夕なに

あの方に褒めていただいた顔かんばせ でしょうか
でも今はもう 目覚めた時もひと独り
見捨てられて眠り 独りぼっちで目を覚す」 35

鳥も鳴かず 羊も鳴かず
天空をよぎ過る一片の雲とて無い
ジリジリと焼きつける岩場と 湯気立ち昇る砂浜に
刻々と増す酷暑が張りつく 40

女は真昼時 ふたたび眠りに沈む
膝まで埋まった羊歯しだの山中で耳にするのは
故郷ふるさとの心地良い風が吹き抜ける音
谷間くだを下るせせらぎの音
女は 眠りの中で低く呻き 45
いつもの夜ごと朝ごとのつぶや眩きを口にした
「わたしの霊はここにただ独りひと
忘れられ打ち捨てられて 彷徨さまよっている」

夢の中で 女にはそれが夢だと分かっていたが
男がそばに現れ そして 消えた 50
女は目を覚ました 小川のせせらぎは消え
戸外の灼熱ひの陽が

柳の木を焼き焦がし 縮ちぢませた
干上がった川床には 白い土埃つちぼこりが舞う
陽の光はまるで灼熱ひの溶鉱炉 55
遮さえぎらんとする屋敷の壁を這い上る
女は 押し殺したような呻きを発し
朝な夕なつぶやの眩きよりも もっと低くぐもった声で
「母なるマリア様 わたしをここで独りひとにしないで
忘れられて生き 捨てられて死んでゆくなんて」 60

立ち上がるや 懐ふところから
誉め言葉に溢れた古い手紙の束を取り出した
「この世でもっとも美しい方への愛を
決して裏切ることはありません」と書かれていた
影が戸口よぎを過り 65

冷やかな目でこちらを見つめる
「しかし もはや そなたの美しさは失われた
だから 永遠ひとにそなたは独りなのだ」
「ああ 残忍な心よ」女は声の調子を変えて
「残忍な愛よ 果ては軽蔑 70
これが愛の果てで 独り残ひとされ

忘れられて生き 捨てられて死んでゆくのでしょうか」

しかし 時には 日暮れ時に
影が戸口^{よぎ}を過り
女の目を覗き込んで 眩^{つぶや}く 75
「間もなく そなたは独りではなくなるのだ」
すべてに降り注ぐ灼熱の炎は
陽^ひが陰るとともに熱さを和らげ
壁から伸びる黒い影は
ゆっくりと東に回っていった 80
女は申いた「朝から晩まで
朝から晩まで 晩から朝まで
昼も夜も わたしは独^{ひと}り残されて
生きても見捨てられ 愛^{ひと}しても独りぼっち」

夕べに空蝉^{うつせみ}が鳴いた 85
あれは潮騒^{しおさい}の音か
女は格子窓を開けて
バルコニーに身を乗り出した
あたり一面薔薇色に染まり
大きな宵の明星が女の涙にキラキラと輝いた 90
沈黙の天空の奥深くまで
夜のしじまが満点の星を覆った
女は 泣きながら呻き声をあげた
「夜明けを知らない永遠^{とわ}の夜がやってくる
独^{ひと}りぼっちが終わる 95
生きても見捨てられ 愛^{ひと}しても独りぼっちが 終わる」

(山中光義訳)